

# 紫川マイトウン・マイリバー整備計画



北九州市長  
末吉興一

## 1. 紫川のおいたち

紫川は、小倉南区の福智山（標高901m）に源を発し、一旦ます湊ダムに入り、その後北流し小倉北区浅野3丁目・許斐町の響灘へと注いでいる二級河川である。上流は田園地域、中流は住宅地、下流では市庁舎、区役所、市民会館などの公共施設やデパート、商店街が建ち並んでいる。

流域面積101.4km<sup>2</sup>、流路延長20.3kmで市内最大の河川であり、北九州市のシンボリック河川で、昔取り入れの季節ともなると、年貢米を積んだ舟が紫川を行きかき城内の米蔵へと運ばれたという。重要な水上交通の幹線であった紫川河口からは、対岸の下関ばかりでなく、京都や大阪へ人や物を運ぶ多くの船が出入りした。また、河口付近の常盤橋（旧大橋）は長崎街道の起点でもあり、商港としても大いに栄えた。

当時、河口付近は良質のアオノリの産地として栄え、川湊のノリ干しは、紫川の風物詩となっていたようだ。また上流では明治の初期から後期にかけて鵜飼いが行われ、アユ・オイカワ・カワムツなどの川魚が獲れていたという。紫川は、市民生活に密着し、小倉の街を育ててきた母なる川であった。

## 2. 紫川の水質の変遷

文字どおり、山紫水明とうなわれた紫川であったが、近代産業の工場排水等で水質汚濁が急速に進行し、次第にアユやその他の魚たちもその姿を消し「母なる川」のイメ

ジを全く失ってしまう危機に瀕するにいたった。また一方では、戦後の混乱期を境に、紫川沿いに不法建築物が建ち並び、都市の景観を損なうばかりでなく、流水の阻害や、汚濁・汚染の発生源となり、河川の機能や環境に重大な影響を及ぼすまでになった。このような社会背景の中で、市民の中から「紫川の清流を取りもどそう」という声が起こりはじめ、市においても、昭和40年に作成されたマスタープランに従い紫川の浄化に力を注ぎ始めた。

下水道整備も強力に進められ、平成元年度末には全市で普及率88.8%（人口普及率）に達している。

不法建築物についても、43年から、10数年の歳月を経て、約600世帯が姿を消した。

これが市民と行政が一体となった浄化運動の結果、現在では、紫川の水質は大幅に改善され、全川一様にきれいな水質と言えるほどに回復してきた。

このような浄化への取り組みの中で、58年5月には、行政の手でアユの稚魚が放流され、その後は毎年市民団体が放流を続けており、今では天然アユの遡上も確認されている。また、今年はシロウオの遡上数が約230万匹と推定されており、昨年の2倍を超えている。これなどの生物指標からも紫川の水質向上を裏づけるものである。

魚ばかりでなく、川がきれいになれば、川にふれてみたくなるのは人間の本能でもあるらしい。63年5月には、日本で初めてのカヌー駅伝競争が催された。

今ではアーバン・カヌーを楽しむカヌーイストの姿がよく見られるなど、市民の憩いの場となってきている。

## 3. マイトウン・マイリバー整備事業

河川の浄化運動は、人々の意識が生活の質や潤いを考えるように変化していく社会背景の中で、進んでいった。そのような、人口の意識の変化は、近年の経済社会の構造変化に伴った価値観の変化によるものとも言える。このような、社会や人々の意識の変化に伴い、川の存在も単なる災害防止の目的や産業利用だけでなく、見て、ふれて楽しむ機能、いわゆる親水機能を持つ空間として認識されはじめてきた。

一方、都市活動にあつては、オイルショック以降、主要産業の低迷、沈滞化の傾向が進み、ここに都市活性化を促すためのカンフル剤の注入が必要となってきた。このため、紫川と沿川市街地が一体となった整備計画を策定し、事業

化することにより、流域住民の要請にも応え、都市景観形成や観光レクリエーション資源として活かそうという構想が生まれた。「水辺を活かした親しまれる街づくり」の構想は全国的に起こっており、国においては、62年度の新規事業として「マイタウン・マイリバー整備事業」を制度創設した。

この事業は、「河川は、都市に残されたうるおいとやすらぎの貴重な水辺空間である」という認識のもとに、治水対策を促進し、都市を代表する河川にふさわしい水辺空間づくりを行っていくために、河川事業と沿岸の街づくりとを一体的に計画し、民間開発を誘導しながら、官民双方の事業を円滑に実施することにより、水辺を活かした、人々に親しまれる街をつくらうというものである。本市においては、62年6月、紫川の景観整備を中心に、周囲の市街地整備も併せた「水辺を核とした魅力ある都市空間の創出」を図るため、学識経験者で構成する「紫川景観整備諮問委員会」を設置した。63年3月には、市民の声を計画に反映させるため「マイプラン紫川」アイデア募集を行った。こ

れは、紫川と周辺のまちづくりについてのアイデアを自由な発想で求めたものである。

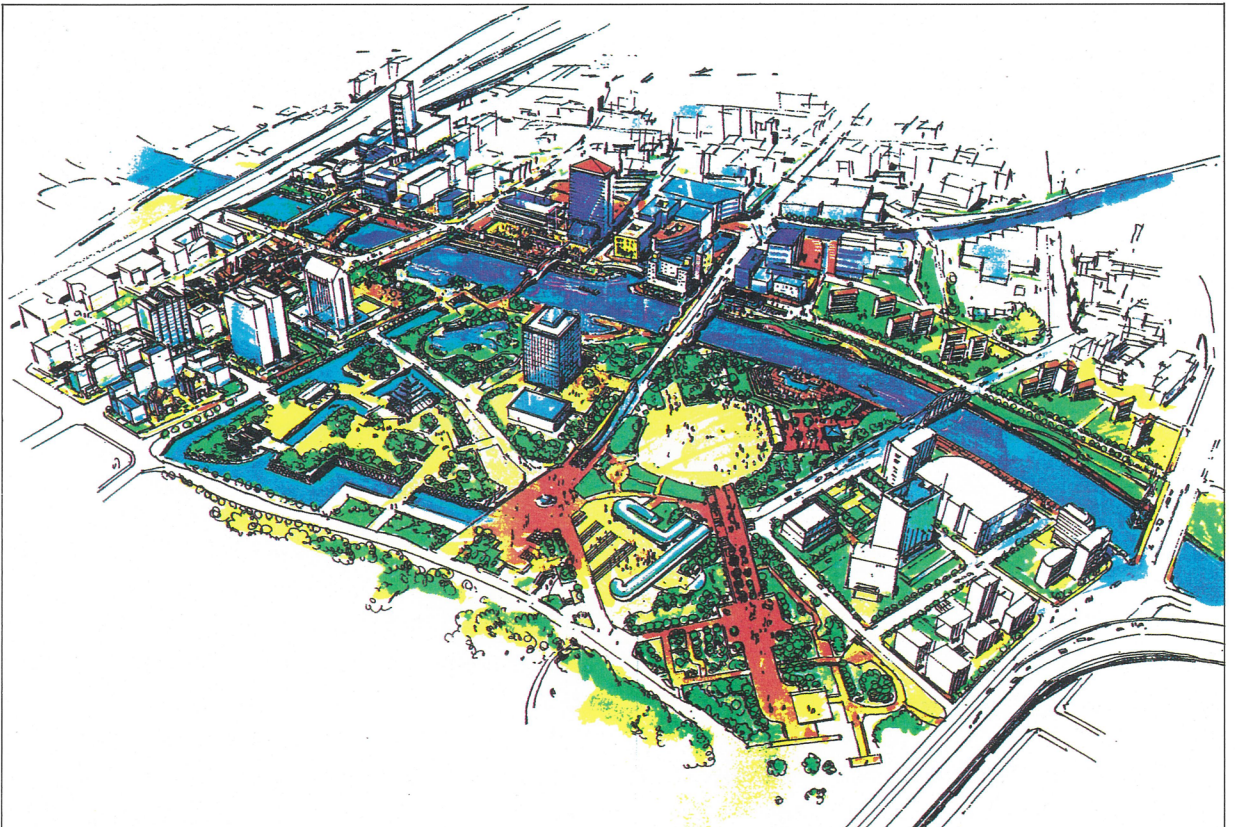
どのようなアイデアでもよく、だれでも応募できるものとしたところ、市内外の、4歳から82歳の年齢層にわたって453点もの応募があった。

この中から最優秀2点、入選44点を決めたが、寄せられたアイデアの中には川面上のイベント広場、シンボルタワー、水の中のすべり台などユニークなものが多く、市民の水辺空間に対する関心の高さを痛感したものである。このような経緯の中で、63年6月、東京都の隅田川、名古屋市の堀川とともに、本市の紫川がマイタウン・マイリバー整備河川の指定を受けたものである。紫川は、下流の約2km区間の都心部が、区間指定を受けた。

さらに平成2年8月、整備計画の認定を受けた。

## 4. 基本構想の制定

本市は、指定を受けたのち、63年7月に従来の縦割り組



基本構想イメージ図



織の弊害を受けずに事業を総合的に調整し、強力で推進して行くため「紫川周辺整備準備室」を設けた。(平成元年10月に「紫川周辺開発室」となり、組織強化された。)整備事業の実施については、整備計画を策定し、建設省四局(都市、河川、道路、住宅)の認定を受けることが必要である。

整備計画の策定にあたっては、前述の「紫川景観整備諮問委員会」から、平成元年4月に「紫川周辺整備基本構想」の答申を受けている。

基本構想では、まちづくりの理念として、次の三つのテーマを掲げている。

#### (1) 紫川を都市のシンボルに

紫川を中心に魅力あふれる景観やふれあいの環境快適な施設をつくり、紫川を都市のシンボルとして表現する。

#### (2) 都市構造の革新

紫川周辺の中心市街地を北九州市の目指す、国際テクノロジー都市に即して、魅力と活気に満ちた都市構造の革新を図る。

#### (3) 独創的価値の形成

紫川の環境整備を軸として、周辺市街地・街路・港湾まで含めた一体的・総合整備を図り、独創的価値を生み出す。

これらの基本構想を受け、整備計画の策定に進む

## 5. 整備計画の基本方針

北九州市は従来、鉄に代表される素材型産業を中心として発展してきたが、近年の産業構造の変化に伴い、高度化が求められている。

また、北九州市は、昭和38年に5市対等合併で生まれたものである。各区の均衡ある発展を目指したこともあって、都市機能の集積もいまだ十分とは言えない状況にある。このようなことから、63年に制定された本市の基本構想である「北九州市ルネッサンス構想」の基調テーマ「水辺と緑とふれあいの国際テクノロジー都市へ」にふさわしい、魅力と活気に満ちた都市の創造を図るため、更に前述の基本構想の精神を受けて、紫川マイタウン・マイリバー整備の基本方針を以下のように設定した。

#### (1) 200万都市圏の中核としての都心形成

紫川沿川の整備事業区域は、交通の要衝であり、また、行政、商業、業務、文化施設も立地しており、都心を形成しつつある一角を占めているが、200万都市圏に対応する魅力ある都心形成が図られていない。

したがって、北九州都市圏の活力を増大させるため、マイタウン・マイリバー整備により都心形成の一翼を担うこととする。

#### (2) 紫川を軸とした安全で創造的な「水景都市」の創出

紫川は、前述のように、古来より人々の生活と密接に結び付いていた。今日においても沿岸には商業、業務施設をはじめ、交通、行政、文化施設が立地している。また、市の基幹公園となっている勝山公園も紫川に接して整備されており、人々の目にふれる場となっている。紫川の治水能力を高め、地域を水害から守るとともに、市街地整備と河川整備を一体的に行うことにより、紫川を軸とした安全で創造的な水景都市を創出することとする。

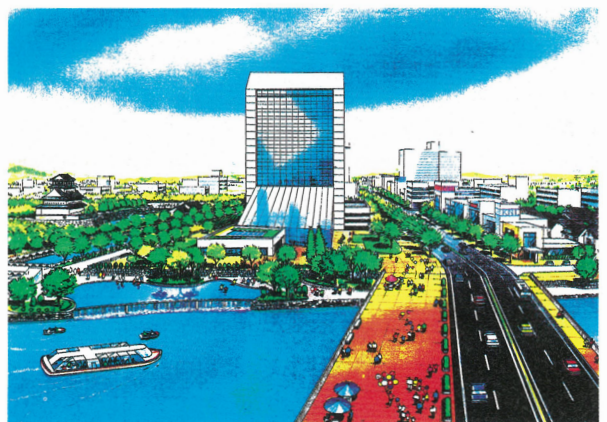
## 6. 景観とアメニティの形成

整備計画を具体化するにあたり、街全体を統一のとれた景観形成のもとに、整備区域内の各地の有機的な結び付きを図り、「住んで」「働いて」「遊んで」楽しい、人々が集まる街づくりをしていくことを重要な視点として設定する。

#### (1) 景観の形成

そのためには、街の中から、ランドマークとしての山々(足立山、皿倉山、石峯山等)が望めたり、また海や山々のつくる美しいスカイラインが眺められるように、海から市街地、さらに市街地から山々をつなぐ紫川の開かれた空間を大切にすることが大きな課題と考える。

①川沿いの市街地においては、道路の拡幅や公開空地の確保により、土地の高度利用にふさわしい建築物を構築するとともに、歩道と公開空地の一体化等により都市空間を確保する。

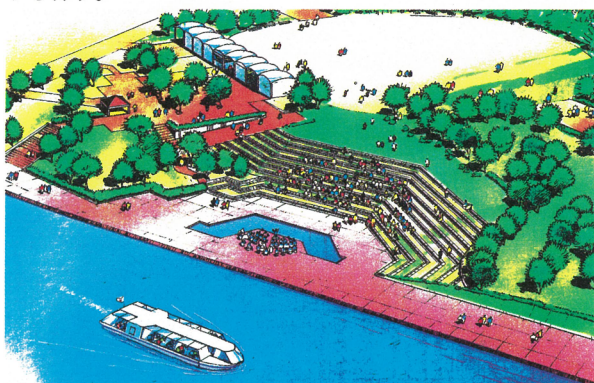


勝山橋付近から室町一丁目地区を望む 基本構想イメージ図



②紫川の沿岸の建物については、ポイントとなる建物以外は、できるだけ建築制限等を行い、川に表てを向けた建物のイメージとし、川沿いの景観形成を図っていく。

③紫川の水辺空間においては、人々が水辺に近づき、寝ころんだり、周辺や対岸の景色をくつろいで眺めることができるような、緩傾斜護岸や階段護岸を整備するとともに、洲浜や水上ステージの設置を考えている。また紫川の水を手でふれながら散歩ができるような高水敷を確保することにより、水際から街や周辺の山々が望めるような場所づくりを行う。



紫川から勝山公園を望む 基本構想イメージ図

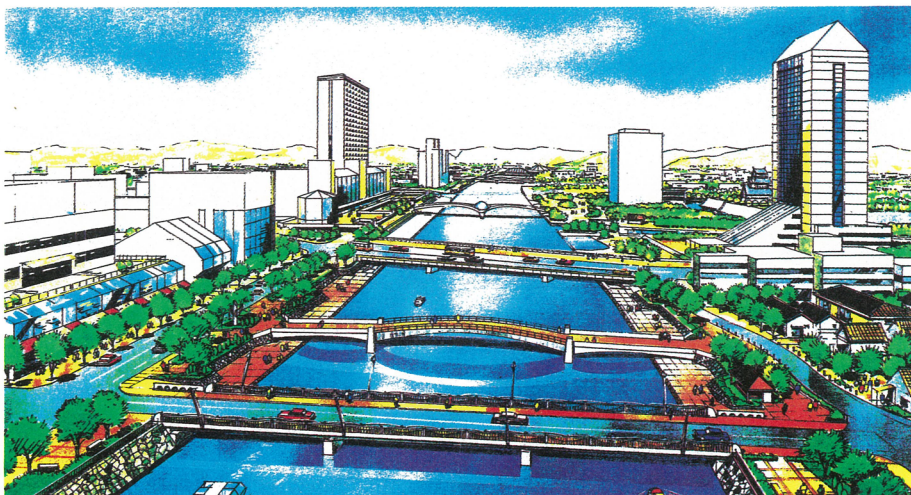
④紫川にかかっている橋については、その歴史や芸術性など、それぞれに特徴をもたせ、全体の景観的統一を考えたデザインで改築する。

⑤さらに、小倉のシンボルである小倉城への見通しを確保するため、市街地の整備によって小倉城が望めなくならないように考慮することが重要である。

## (2) アメニティ形成

整備区域内の各地区は、緑や水による潤いのある歩行者空間と、各地区に存在する小公園や紫川の親水空間によってネットワーク化を図り、ただ歩くだけでも楽しい文化の香りのする街づくりを行っていく。

特に、市街地と勝山公園内をつなぐ歩行者空間を設ける



山陽新幹線高架付近から紫川上流を望む 基本構想イメージ図

ことにより、市街地の間に人の流れをつくり、その流れの中から公園内への利用を誘発していく。

勝山公園は、小倉城を中心に歴史的な広がりを感じるように、また、大イベント広場等を設け、紫川と一体となった都会のオアシス空間として、多くの人々に利用してもらえよう計画している。

これらの街づくりにおいては、街全体が河川空間や商業空間、居住空間、公園等のそれぞれの機能を有し、水景の中に繰り広げられる一つのアートとして、また、都市づくりの象徴として、区域全体に開放された美術館をつくって行くような気持ちで取り組むことが大切であると考えます。

## 7. 事業化に向けて

紫川の水辺環境の整備など、インフラ整備先行により、地域の開発ポテンシャルを高めていき、区域の市街地整備をマイタウン・マイリバー整備構想にもとづいて、民間を誘導し、各事業を共同歩調のもとに進めて行く必要がある。良好な紫川の水辺環境は、市民の共有の財産でなければならない。

紫川の水辺の持つ魅力を引き出すことにより、訪れて楽しい、住んで楽しい、働いて楽しいエネルギーな北九州市の都心部を創造していくには、この紫川マイタウン・マイリバー整備事業の推進が大きなカギを握っている。北九州市の小倉北区の市街地を都心として位置づけ、その中心を流れている紫川を軸とした「水景都市」づくりをめざして整備を推めていきたいと考えている。